



節分・雛祭りを入権保育の視点で考える



<保護者調査の結果>

2006年11月実施 476名回答

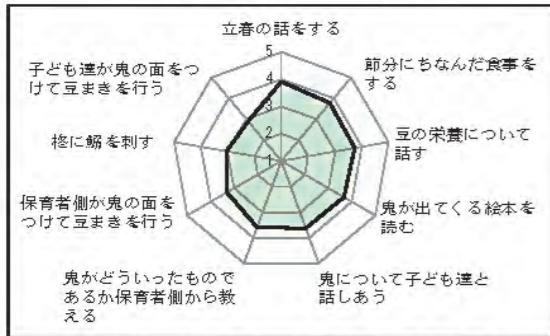


図1 節分行事について園に希望すること

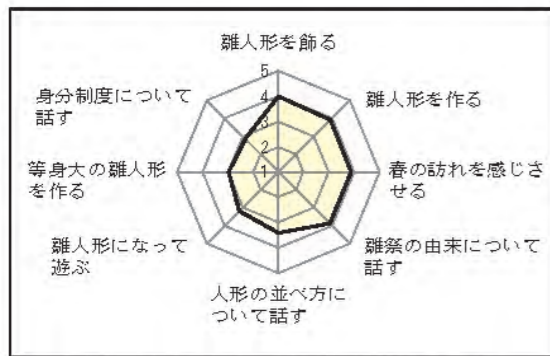


図2 雛祭りについて園に希望すること

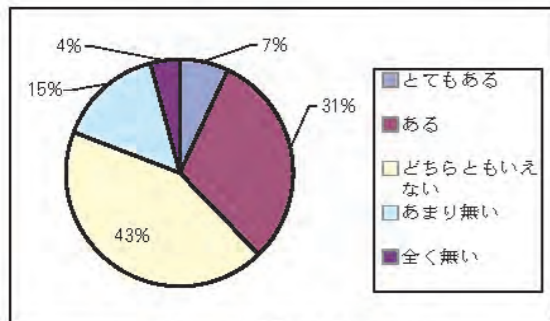


図3 人権問題への関心度

<保育所(園)調査の結果>

2006年9月実施 82園長

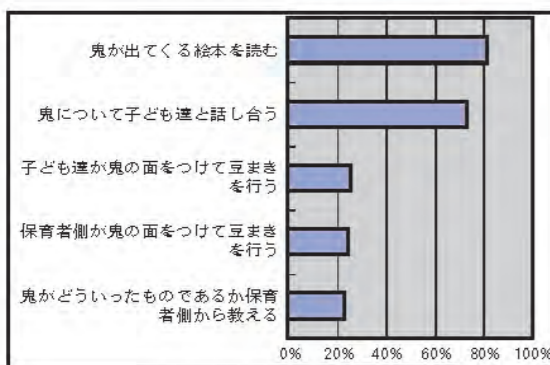


図4 鬼に関する実践内容

<両者の比較>

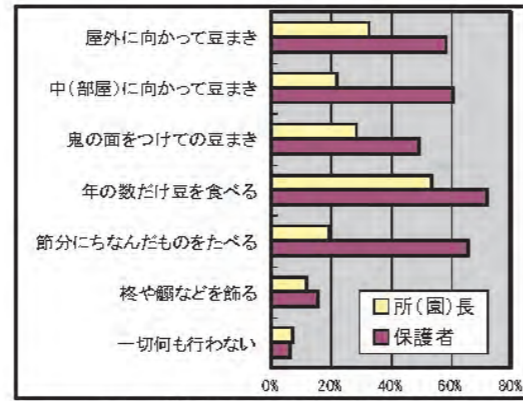


図5 節分にすること(複数回答)

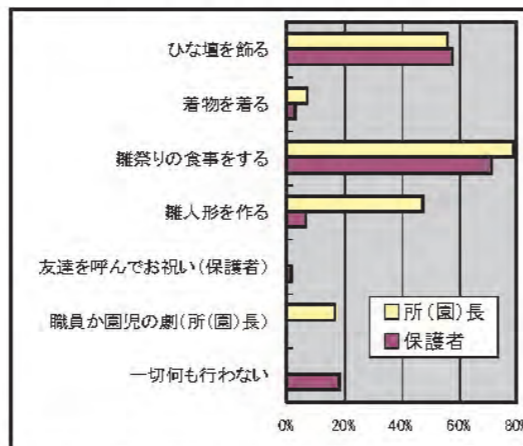


図6 雛祭りにすること(複数回答)

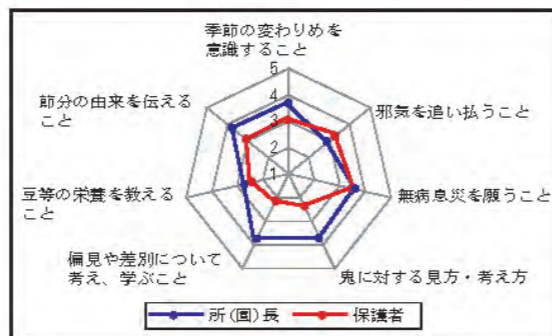


図7 節分で重要視していること

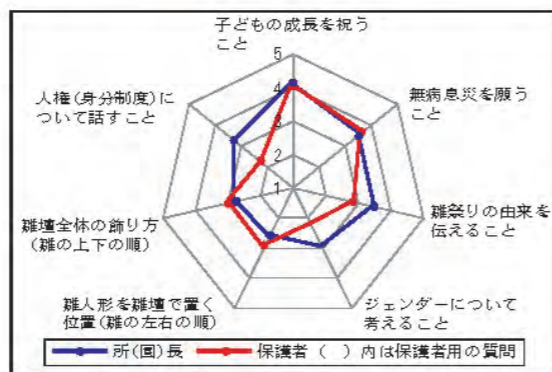


図8 雛祭りで重要視していること

(注: 図1、図2の5段階表示は、1が「全くして欲しくない」で5が「とてもして欲しい」。図7、図8の5段階表示は、1が「全く重要視していない」で5が「とても重要視している」)

プロジェクトがめざすこと

本プロジェクトでは、「ある現場での実践を共同で創り上げ、その成果を共有する」のではなく、「より多くの現場ですすでに行われている実践を集約し、その多様性と奥深さをふまえて、次の実践を考える」ことを目的としました。

すぐれた実践を創ることも必要ですが、より多くの保育にかかわる方々が、実践知(実践からはぐくまれた知恵と配慮)を共有する取り組みも必要であると考えたためです。また、伝統行事を入権保育の視点で考えることとし、いくつかある伝統行事のなかから、節分と雛祭りを選びました。

プロジェクトの今までの経緯

2006年1月まで
2月・3月
4月～
7月～12月

プロジェクトで何をするのかを検討しました。
節分と雛祭りについての実践計画をうかがい、いくつかの保育所を訪問して実践を見学しました。
見学した結果などをKJ法という手法を用いてまとめました。
節分と雛祭りについて、保育所の考えと保護者の考えを知るために、アンケート調査を企画し、実施して集計しました。
今までの見学や調査のまとめをし、実践の多様性をリーフレットにして配布しました。(このリーフレットです)

プロジェクトの今後の予定

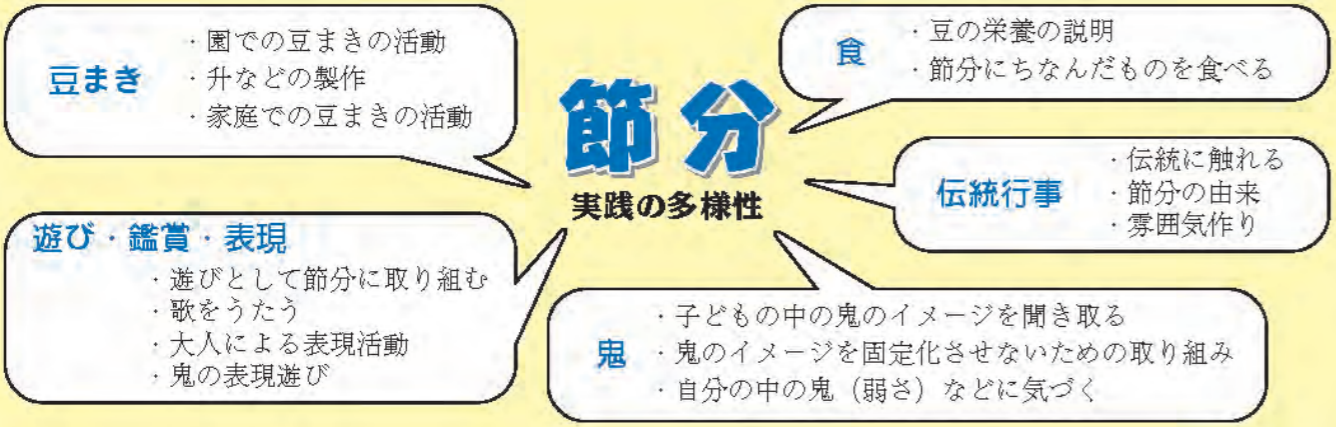
2007年2月・3月
4月～

子どもたちの、節分や雛祭りの取り組みのなかでの「つぶやき」をお教えいただき、まとめます。
子どもたちのつぶやきなどをもとに、行事のあり方に関する人権の視点からのまとめをします。その成果を、今回と同じようにして、共有したいと思います。

☆ 伝統行事をみる視点 ☆

伝統行事のあり方やその子どもたちへの影響については様々な意見がありますが、いずれの立場であっても、**子どもの幸せを願う気持ち**があります。伝統のかたちでするしないにかかわらず、その時期に、**子どもの成長を感じたり、喜びや将来への願いを表現して共有したりする**のは、すべての実践に共通しているように思えます。そのうえで、**さまざまな要素が組み合わされ、多様な実践が展開**されています。

また、流行のサイクルがどんどん短くなると感じられるなかで、長い年月を経て伝えられたものには、異なる世代をつなぐ力があるように思えます。地域の方や高齢の方のお話を聞いたりするなかで、**人と人のつながりの歴史と広がり**を感じさせてくれるようです。



豆まきと鬼のイメージ

節分では、子どもたちに「どうして豆まきをするのか」「どうして豆を食べるのか」と、その由来を語っています。実際の活動としては、豆を投げたり食べたりする形式を継承しているだけではありません。なかには、豆まきをしない実践もあります。

たとえば、子どもたちは、豆まきをしなくても、鬼が出てくる歌をうたったり、鬼の表現遊びをしたり、保育者による劇を鑑賞したりしています。そこでは、日常場面で実際に接することのない鬼に関するイメージをつくっているようです。また、子どもたちは家庭での節分行事などを通じて、すでに鬼に関するイメージをもっている場合もあり、その「鬼」のイメージを揺り動かす実践がなされている場合もあります。



鬼のイメージの「揺れ」

鬼に関しては、提示の仕方がさまざまです。大別すると3つあるようです。ひとつは、鬼は外からやってくる悪い存在であるとして排斥するものです。もうひとつは、自分のなかの弱さなどを「怒り鬼」「泣きむし鬼」などと鬼にみたてるものです。ただし、泣きむし鬼などを演じる保育者を一度は豆まきで遠ざけながらも、最後にその鬼と仲良く遊ぶという実践もみられました。そして、最後のひとつは、子どもたちがその鬼の立場にたつものです。たとえば、『つのはなんにもならないか』（作・絵：きたやま ようこ、偕成社）という絵本のストーリーを、幼児が劇で演じるような実践です。

この3つのタイプが、ある保育所においては同じ日に行われていました。そこでは、子どもたちの鬼についてのイメージは、固定化されることなく、大きく揺れ動いたのではないかと思います。

次の問いかけについて、このリーフレットにはさんだ用紙でご回答ください。

- * 「豆まき」「鬼」などの5つ以外に、節分行事の要素はないでしょうか。
- * 鬼にかかわる3つの提示の仕方について、組み合わせて実践されましたら、その実践の概要をお教えてください。
- * 子どもの鬼に関するイメージの「揺れ」があらわれた「つぶやき」を聞かれたらおしえてください。

願いの共有

- ・保護者の願いなどを壁面に展示
- ・保護者の喜びなどを園だよりによって共有

人とのつながり

- ・地域や高齢の方のお話を聞く
- ・お茶や雑あられなどを一緒に食べる

伝統行事

- ・雑祭りの由来
- ・桃の節句、季節の変わりめの認識

雑祭り

実践の多様性

鑑賞

- ・保育者によるペープサート
- ・絵本や紙芝居

遊びの表現

- ・歌や手遊びをする
- ・子ども自身が雑人形になって演じる
- ・雑祭りの時に自分が体験したことや感じたことを製作する
- ・自分で雑人形を製作する



継承されつつ変わりゆく伝統

伝統は単に継承されてきたのではなく、途中で変化しています。雑祭りも、歴史上のどの時点にさかのぼるかで、実施のしかたも異なります。たとえば、燃やし雑や流し雑のようなかたちで実践している園もありました。最上段の男女の雑人形の並び位置についても、歴史上のある時期に変化したのですが、その変化を意識しての実践の企画や記録は、今回は見あたりませんでした。また、雑人形の製作において、同性のペアで作ることをどう考えるのかについての記述はありませんでしたが、子どもたちの製作した雑人形には性別や人数の点で多様性があるかもしれません。

段差と並べ方の選択

雑段の段差をなくしてみたり、人形が並ぶ位置や雑壇全体の飾り位置も変えてみたりするという活動もありました。そのなかで、雑人形の並び位置（左右、上下）を、子どもたち自身が考えて並べようとする実践もありました。そこでは、並べ替えることも自由でしたが、決して並べ替えるを強いるものではありませんでした。深読みかもしれませんが、子どもたちに、これから生きていく社会のあり方を問いかけ、選んでもらっているようにも思いました。

次の問いかけについて、このリーフレットにはさんだ用紙でご回答ください。

- * 雑祭りのあり方について、どのようなことを話し合われたでしょうか。
- * 雑祭りには、「願いの共有」「遊びの表現」などの5つ以外の要素はないでしょうか。
- * お雑様は「並べ替えをしてもいい」という規範と「決まった位置におくべき」という規範の両方に接して、子どもたちはどのように揺れるのでしょうか。その揺れを感じさせる「つぶやき」があったら、お教えてください。